

新設日本人学校（チカラン日本人学校）における取り組み



前チカラン日本人学校教頭

神奈川県川崎市立四谷小学校教頭 島田 道雄

キーワード：新設・準備・開校・コロナ禍

URL チカラン本校 <https://cjs.or.id>

1. はじめに

平成 31（2019）年 4 月に新設された日本人学校は 2 校あった。1 校がメキシコで、もう 1 校が私の赴任したインドネシアのチカラン日本人学校（※1）である。本稿では、日本国内でもなかなか巡り合うことのない学校を作り上げていく過程（実践）を取り上げることにする。そこにはもちろん、私たち教員だけではなく、現地の日本人コミュニティや日系の企業、そして在外公館を含む外務省や文部科学省などの政府機関による多くの苦労や努力がある。新設校の開校とその後の 2 年間の様子を、教頭の見解から紹介したい。

※1 文部科学省に報告書等を提出する際はジャカルタ日本人学校チカラン校と表記するが、その他の場面ではホームページを含めチカラン日本人学校としている。このため、本稿でもチカラン日本人学校と表記する。

2. 新設校としてのチカラン日本人学校

（1）設立準備委員会による開校準備作業

①構想から 4 年

在留邦人有志が学校設立に向けて活動を開始したのが 2015 年。つまり開校まで 4 年で諸々の準備をおこなったことになる。設立準備委員会の第 1 回会合が 2017 年 6 月、この年の 11 月には学校の設置場所も決定している。この間、日本企業の寄付を募るため、準備委員会のメンバーは相当数の企業を回ったという。翌 2018 年にはインドネシア政府の許可を取得して、日本政府関係者による現地視察をうけ、2019 年 3 月に校舎と体育館が竣工し、4 月開校の運びとなる。

②準備委員会の構成

設立準備委員会は、チカラン地区（東部ジャカルタ）の日本企業（工場）の社長をはじめ、ジャカルタジャパンクラブの会員企業、大使館職員、JJS（ジャカルタ日本人学校）の事務局長も含めたメンバーで構成されている。さらに、チカラン日本人学校の新しい事務長となる方と以前 JJS で教頭を務めた経験のある方も入っていた。このことによって開校後への継続性と学校現場に即した準備が実現したようである。

③入学受付と教員の着任まで

文部科学省派遣教員・維持会採用教員が着任するのが 4 月の下旬であり、それまでは、新事務長を中心とした設立準備委員会のメンバーで準備を行っていかねばならない。黒板や児童生徒の机・椅子、音楽室や理科室などの特別教室の備品、ロッカーや教師用の机などを買い揃えることも、すべて行ったという。また、校章の作成依頼、児童生徒用の決まりや教職員の就業規則の原案を作成、入学（編入学）受付・名簿作成や就学相談などもあり、設立準備委員会の開校に寄せる並々ならぬ思いが感じられる。

（2）文部科学省派遣教員と維持会採用教員が着任した。

①前任者がいない中での着任

4 月に教員が着任したが、通常は前任者が「受け入れ」という形で準備をする。具体的には赴任者の住宅・

携帯電話・自家用車の準備、自家用車のドライバーの手配などがある。さらに着任してからも現地での生活に慣れるために、各種手続きや支払い、買い物や生活全般のサポートも必要となる。日本とは違う治安状況での日常生活上の留意点(犯罪に巻き込まれないため)や現地特有の病気(デング熱やウイルス性胃腸炎)や病院に関する知識も伝えなければならない。受け入れは、開校準備委員会のメンバーの助けを借りたり、海外赴任サポートのエージェントを利用したりしながら行った。また3月までJJSで勤務していた教員がいたので、その教員の手も借りながら進めて行った。現地在住邦人の養護教諭の存在も大きかった。

校長は3回目の派遣、教頭の私は2回目の派遣と海外生活の経験はあるが、ほかの多くの教員は海外での生活が初めてである。さらに維持会採用教員の中には、教員という仕事自体が初めての者もいた。学校の準備は文部科学省派遣教員が中心となった。特に小学部は、6学年の学級担任のうち半分の3人は初任の教員であった。教室掲示から学級開きの準備・授業準備など、文科派遣教員と2学年ペアとなり準備をした。

(3) 開校を祝う

①入学式と開校宣言

4月18日(木)、体育館にて入学式・始業式を行った。入学式の前段で学校維持会の副理事長より開校宣言をしていただき、名実ともにチカラン日本人学校がスタートすることとなった。入学式には、学校維持会はもとより、大使館からも特命全権大使・総括公使にもご臨席を賜った。新設校の開校であるため、小学1年生・中学1年生のいわゆる新入生以外の児童生徒も、すべてが新しく学校に入る(新編入学)こととなる。入学式・始業式の後は、全校児童生徒と保護者、来賓の皆様方全員での記念撮影も行った。

②音楽鑑賞会

7月20日(土)、開校に当たってのお祝いの意味も含めて、設立準備委員会が著名なピアニストの方を日本から招待し、音楽鑑賞会を催す計画を準備して下さっていた。また、アセアン大使夫人も歌唱を披露して下さい、企業から寄付していただいたグランドピアノを使つての、素晴らしい音楽鑑賞会となった。

②開校記念式典

11月23日(土)、正式に開校を祝う式典が行われた。4月にはまだ完成していなかった校庭やプール等の設備も完成し、すべての施設が整った段階での開校式典となった。来賓としては、特命全権大使や学校維持会理事長をはじめ、これまで開校に携わってくださった大使館関係者・多くの企業・現地在留邦人の方々、そして地元インドネシアのブカシ県の関係者も出席して下さい。式典では、校歌の披露も行った。児童生徒の意見を取り入れて校長が作った歌詞に、音楽専科の教員の知り合いにあたるピアニスト(作曲家)の方に曲をつけていただいた。これで、校章・校歌が揃ったことになる。式典の後は、ご来賓の方々には校舎内外を見ていただいたり、学習発表会を行い児童生徒の様子を見ていただいたりする機会を準備した。

3. 初めてのことばかりの1年目

(1) 施設・設備の整備

①図書室の書籍をそろえる

開校当初は、図書室に本がほとんどなかったの、まずは寄付により書籍を揃え、足りない部分を購入本で補っていくこととなった。設立準備委員会メンバーのツテで、富山県の図書館と中学校からまだ十分に使用に耐える廃棄の書籍を送っていただいた。また、ジャカルタにある国際交流基金や近くの工業団地にある日系企業からも書籍の寄付があり、ジャカルタ在住の有志の方々やメールで連絡をいただいた京都の中学校からの寄付もあった。これらの寄付により、夏休みを迎えるころには、図書室らしい雰囲気になってきた。

②教材・教具をそろえる

設立準備委員会では、理科室の実験用具や音楽室の楽器、家庭科室のミシンなどの教材を発注していたも



の、日本からの輸入となるため通関手続き等に時間がかかった。このため開校の時点では届いていないものも多数あり、あるもので工夫したり、単元を入れ替えたりして学習を進めて行くしかなかった。実際に教材が届いたのは6月末ごろ、1学期も終盤に差し掛かる時期であった。

③校庭とプールの完成は7月末

校舎と体育館は3月に完成していたが、駐車場の一部や校庭さらにプールの完成は7月末で、1学期は使用できなかった。このため、全ての体育の学習は体育館で行い、水泳の学習も2学期以降に行うこととしていた。校庭は芝生で完成時はきれいであったが、維持管理がなかなか難しい。水やりが欠かせず、とげのある雑草などもすぐに生えてきてしまう。ローカルスタッフとも協力して当たった。また完成したプールも、ろ過機を使った循環式であったが、水質がなかなか安定せずこれまた苦労した。

(2) 行事を実施することの難しさ

①運動会

児童生徒数が少ないためプログラムが少なく時間もかからないことと、昼近くになるとかなり暑さが厳しくなることから、午前中で終了するように計画を立てた。種目は徒競走・団体競技・表現の3つ、さらに準備運動と全校リレーを行った。全校リレーは小学部1年生から中学部の生徒まで全員で紅白に分かれてバトンをつないだ。少人数ならではの、楽しい競技となった。さらに、健康診断を行っている病院にも協力を仰ぎ、当日は救急車を配置し、医師と看護師に待機をして頂いた。

②遠足・修学旅行

遠足などの校外学習は、目的地の選定が難しい。安全面や衛生面なども考慮して、場所を選定しなければならない。小学1・2年生の遠足は、近くのワニ園(ワニ専門の動物園)に行ったが、あまり評判が良くなかった。小学3・4年生の遠足(ボゴール)、修学旅行では、小学5・6年生(バンドン)と中学部(ジョグジャカルタ)、これらはJJSの旅行先を参考とした。修学旅行では、現地の日系の旅行会社にお世話になった。どちらもインドネシア国内では、比較的有名な観光地であるが、安全に旅行をするために、移動手段や宿泊地なども丁寧に計画する必要があった。現地踏査も管理職と担当学年で行い、細かく準備を進めて行った。

③学習発表会

開校記念式典と同日に行った学習発表会であったため、準備は式典と並行して行った。ステージでの発表と展示による発表を行ったが、やはりステージ発表はプロジェクターやスクリーン、照明などが十分にそろっておらず、急遽製作したり企業からお借りしたりした。それでも、できる内容を工夫して各学年でステージ発表を行った。この時も、運動会と同じ組み合わせで、複数学年が協力して行う形をとっていった。

(3) 現地理解教育の実践

①インドネシア語の学習

インドネシアにある日本人学校であるため、教職員の中にはインドネシア語のネイティブ教員がいて、各学年で週に1回程度インドネシア語の学習を行っている。その国の文化を学ぼうとする時に、言語の学習も欠かせない。インドネシア語の教員の指導の工夫もあり、児童生徒は楽しく取り組んでいた。両親のどちらかがインドネシア人である国際家庭の児童生徒は特に、自身の経験も活かしながら意欲的に学習していた。

②現地の自然や文化を学ぶ

総合的な学習の時間では、国際理解教育として、現地の自然や文化について課題を持って、調べ学ぶという学習を行った。前例がないために学習を始める段階では各教員も戸惑いがあったようであるが、学習が進んでいくうちに教員も児童生徒も、インドネシアの自然や文化の多様性に触れることができたようである。

③行えなかった現地校との交流学習

日本人学校は、現地の学校やインターナショナルスクールの児童生徒との交流が行えることが、1つの強

みでもある。チカラン日本人学校でも、開校2年目からこの交流学习を行おうと考えていたが、1年目の終盤からのコロナ禍により、行えなくなった。2年目の少し落ち着いた時期に、一部の教員で現地の学校を訪問し、次年度以降の交流を約束したが、その後の感染再拡大で全く見通しが立たない状態となってしまった。

4. コロナ禍での2年目

(1) オンラインでの授業を

①1年目の終盤より、コロナ対策

開校した年度（1年目）の終盤に差し掛かったころから、コロナ禍に見舞われた。日本での公立学校休校の情報が入り、校歌を作曲していただいたピアニストの方にインドネシアにお越し頂く計画もキャンセルとなってしまった。卒業式も来賓は呼ばず、児童生徒と保護者・教職員のみで行った。また、新年度（2年目）を見通せないまま春休みに入ることになり、休み中には児童生徒の日本への一時退避や新入学の延期が続々と報告され、当初予定していた100名を超える児童生徒による2年目のスタートは幻となった。

②4月からオンラインによる授業、そしてオンラインを併用する分散登校へ

結果的に新年度は始業を数日遅らせ、それまでに双方向型オンラインによる授業を行うための準備をした。入学式は対面で行える時期まで延期し、新入生は校長・担任と記念撮影を行うのみとした。オンラインによる授業の実践は、海外子女教育振興財団の「コロナ禍におけるICTを活用した教育体制構築に関する実証事業」に応募し研究成果もまとめている。詳細はそちらに譲ることとする。Wi-Fi環境の整備からオンラインによる授業の進め方まで、2年目も初めて取り組むことばかりで、教職員は大変苦勞をすることとなった。

オンラインによる授業もすべての学習が十分に行えるわけではなく、実験・観察や実技等は行えない。このため感染の様子を見ながら6月中旬から、登校して学校で行う授業とオンラインによる授業を小中学部で交互に行う分散登校を始めた。さらに7月末の1学期末には、何とか通常登校を実施することができ、数か月遅れとなったが入学式も行った。卒業式同様に児童生徒と保護者、教職員での対面での式となった。

③分散登校と対面式での卒業式

その後、夏休み明けも短期間ではあるが通常登校を実施したものの、感染拡大は収まらず、再び分散登校へと逆戻りしてしまった。地域の感染者の状況を常にリサーチしながらの対応し、オンラインによる授業だけの時期もあったものの、年度末までなんとかこの分散登校の形で行っていった。2021年（2年目）の3月の卒業式は、前年同様の児童生徒と保護者・教職員での対面での式となった。

(2) 感染防止対策

①日々の感染防止対策

分散登校を続け、最低限の行事を行うことができたのも、児童生徒と教職員の感染防止対策をしっかりと行ったためである。児童生徒は車で登校してくるので、ドライバーの検温も行った。分散登校を始めるときには、これらの感染防止対策を保護者向けに説明して、承諾書をご提出頂き、児童生徒を登校させた。

②感染防止対策を行いながらの行事

コロナ禍のため、運動会は保護者を呼ばずに児童生徒だけで行った。種目も制限をしてできる限り短時間で行うように計画した。また遠足は中止としたが、修学旅行はどうしても経験させたいということで、貸し切りの専用バスでの移動・ホテルの部屋も原則1人部屋、見学地も含め十分に感染対策をとることで実施した。下見を含め準備はかなり苦勞をしたが、旅行会社や担当学年教員の努力もあり、感染者を出さず、実施することができた。学習発表会のステージ発表は、実施が難しいという教職員からの意見もあったが、できる限り実施できる方法を探った結果、期間限定でYouTubeでの動画配信の形をとった。

5. おわりに

開校とコロナ対応という非常に厳しい2年間であった。そのような中でも新しい試みを行うことができたのも、これまで多くの教育実践を行ってきた校長はじめとした皆の英知が重なり合ったからに他ならない。開校3年目も昨年度以上にコロナの厳しい状況の中、新しい管理職と一緒に実践を積み重ねている派遣教員、事務職員やローカルスタッフは、さらに工夫を重ねて現地で暮らす子どもたちのために日々の実践を続けている。